



Title	明治期の文学における〈装い〉：夏目漱石を中心に
Author(s)	坂井，二三絵
Citation	大阪大学，2011，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58527
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【14】

氏 名	坂 井 二 三 絵
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 4 2 8 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	明治期の文学における〈装い〉―夏目漱石を中心に
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 出原 隆俊 （副査） 教 授 清水 康次 講 師 合山林太郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、夏目漱石の作品を中心に、明治期の小説について〈装い〉という視点から考察し、新しい読みを提示しようとしたものである。四百字詰め原稿用紙に換算して、およそ340頁の分量である。

第一部「心情の表現としての〈装い〉」では、身につける人物の心情を読み解く鍵となる〈装い〉の描写について論じる。

第一章で『虞美人草』を論じる。従来注目されることのなかった小夜子の「おしゃれ心」を指摘し、小夜子の意外な側面を浮かび上がらせたうえで、最終的に小野との結婚ですべてが解決できるわけではないことを述べる。糸子の存在も重視し、その独自の見方が甲野を救うことにつながるとも論じる。

第二章では『三四郎』を対象とし、当初は、三四郎によって捉えられた都会的で自由な美禰子像が読者に伝えられていたが、美禰子の〈装い〉の変化が、「直接は語られない」「思いを示唆」しているとし、彼女の痛みを浮かび上がらせる。

第三章は『それから』を扱う。この作品では、代助から三千代に贈られた指輪の、保護者からとしての意味と愛の証という二重の意味を指摘し、後者に傾斜していくことを論じる。そこから三千代の積極性も明らかにする。代助が三千代の〈装い〉に敏感であり、心を通わしていくとする。

第四章は『門』を採り上げる。この作品においては全くと言ってよいほど注目されることがなかった〈装い〉に着目し、〈装い〉が宗助・御米夫婦の「親和性」を象徴するとともに、時には宗助が御米の痛みの深刻さに届いていないことを示すなど、夫婦のあり方を多面的に描き出すとする。

第二部「〈装い〉を見つめる視線」では、装う側と見る側の間に生ずるずれや葛藤が重要な意味を持つと思われる作品を取り上げる。

第五章は樋口一葉『われから』を論じる。従来は注目されることのなかった夫の「古洋服」の意味を考察するとともに、主人公格の女性の内面について、着物などについての世間一般のイメージから乖離し、自己イメージすらも幻想となっていると指摘する。

第六章は、「市電での男から女への視線を描く作品群」の一つとして漱石の『彼岸過迄』を取り上げる。自分の感情や欲望で女の〈装い〉を見ていた敬太郎が「双方向的な関係の構築を求め」ることになるとし、それが作品自体の構造を支えていると指摘する。「相手と直接向き合う」ことが「須永が救われる道の手がかりとな」るとも論じる。

補論として、第六章でも言及した、鷗外『電車の窓』を扱い、一葉の作品における女たちの言葉と類似する表現が用いられていることを明らかにしたうえで、この作品が、女を見て、〈物語〉を想像する男の視線を批判する視点を内包している点で特徴的であると論じる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来は散発的に取り上げる程度にとどまっていた漱石作品における〈装い〉の問題を集中的に取り上げ、様々な作品の新たな読みの可能性を提示しようとする、意欲に満ちた論文である。いくつかの点で、その試みは重要な成果を上げている。たとえば『虞美人草』の小夜子の「おしゃれ心」については、これまでにまったく指摘がなく、極めて新鮮な提起であり、作品全体の見直しにもかかわってくる。『三四郎』の美禰子の〈装い〉の変化についても、従来の読みを補強し、より踏み込んだ読みを誘引する意味を持つと思われる。『それから』、『門』についても、これまでは注意を払われていなかった箇所への言及があり、それぞれの作中人物の把握をより深化させ、全体像の把握にも新たな視野をもたらす重要な成果を上げている。また、『彼岸過迄』の敬太郎という存在については、同時

代の作品を参照することなどによって、従来の検討を多面的にし、新しい作品論につながる可能性をはらんでいる。鷗外『電車の窓』についても、一葉作品との対比など、従来指摘されてこなかった側面についての言及があり、さらなる読みの進展の可能性を思わせ、評価すべき論点を見ることが出来る。

一方で、今後に望みたい問題も少なくない。「明治期の文学における〈装い〉」と謳っている以上は、明治期の作品全体を俯瞰するような視点が要請される。総論が欲しいところであり、尾崎紅葉、泉鏡花、谷崎潤一郎などへの何らかの言及が必要だと思われる。

また、〈装い〉ということについて、飾るという側面と同時に、内面を隠蔽するという機能があることに自覚的であるべきである。

さらに、論文全体の構成にやや無理があることも指摘せざるを得ない。それぞれの論において、議論の正当性を保証すべき用例については、小説に描かれたものの引用にとどまっており、より広い視野で知りを収集することが要請される。全体を通して、やや強引な議論がある箇所や、もっと踏み込んで論じ、より大きな読みの更新を目指すべき箇所もなしとしない。しかし、そうした点を含んでなお、〈装い〉に関して達成したことは少なくなく、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。